



本学教員が関わった本

## 清華簡研究

湯浅 邦弘 編  
汲古書院、2017年9月

紹介者

福田 哲之  
(教育学部 教授)

本書のタイトルにある「清華簡」とは、北京の清華大学が所蔵する、今からおよそ2300年前の中国古代の竹簡をさす。この竹簡は盗掘されて香港に流出し、2008年7月に清華大学に寄贈された。数量はおよそ2,000枚、夏・殷・周および春秋時代の故事や歴史などを記した六十篇以上の古代書籍からなり、その多くはすでに失われた古逸書であった。盗掘品のため出土地は不明であるが、炭素14年代測定および年輪補正によって、竹簡の年代は紀元前335年～紀元前275年の戦国時代中期後半と推定されている。寄贈後2年におよぶ保存処理と整理・研究を経て、2010年12月に竹簡の図版および釈文注釈を収録した報告書の第一分冊『清華大学蔵戦国竹簡(壹)』(清華大学出土文献研究与保護中心編・李学勤主編)が出版され、現在、第八分冊ま

で刊行されたところである。

本書はそのうちの第一分冊から第六分冊までに収録された竹簡を対象とし、編者の湯浅邦弘教授(大阪大学)を中心とする「中国出土文献研究会」のメンバー6名が2011年から2016年の間に執筆した論文(書き下ろしを含む)で構成される。本学からは筆者と同僚の竹田健二教授もメンバーの一人として執筆しておられる。

20世紀以降、中国古代にかかわる研究は文字通りの画期的進展を遂げ、現在もその状況は続いている。それをもたらしたのが「出土文献」と称される新資料の出現であった。ここで研究対象となる文献資料がどのように変化してきたかを大まかにたどってみよう。

19世紀以前における文献資料は木版による版本が中心であり、その年

代はおよそ11世紀から13世紀の宋代を上限とする。しかも宋代の版本すらきわめて希少であったため、宋版の書物を数多く所蔵していることが当時の蔵書家のステータスシンボルとなっていた。

そうした状況に変化をもたらしたのが、19世紀末に敦煌の莫高窟から偶然に発見された敦煌文書である。その数量は三万巻以上とも言われ、書写年代は4世紀の六朝期から11世紀初めの宋代にわたる。内容は仏教文献が中心であるが、儒教や道教の文献をはじめとする経史子集の広い範囲におよび、大量の古写本の発見は当時の学者を驚倒させ、「敦煌学」という新たな研究領域を形成するに至った。

20世紀に入ると西欧列強のシルクロード探検により、中国の辺境地帯から晋代・漢代の木簡が発見され、紙が普及する以前の木簡を資料とする研究がスタートした。これらの大部分は匈奴防衛線の軍事施設でやり取りされた行政文書が中心であったが、中華人民共和国成立後の20世紀後半になると竹簡に書写された書籍の出土が急増してくる。これらの竹簡は古代の墳墓の副葬品で、その多くはビルや鉄道などの建設工事がきっかけとなって発掘調査が行われ

たものであり、とくに70年代には、銀雀山漢簡（1972年出土）、馬王堆漢帛書（1973年出土）、睡虎地秦簡（1975年出土）など、紀元前3世紀から紀元前2世紀後半にかけて書写された秦漢の簡牘・帛書が相次いで出土し、世界的なセンセーションを巻き起こした。

戦国期の竹簡はすでに1950年代に出土していたが、数量が少なく保存状態もよくなかったため、十分に研究を進めることができなかった。70年代以降になると資料数が増加し、包山楚簡（1987年出土）、郭店楚簡（1993年出土）、上海博物館蔵楚簡（1994年購得）によって本格的な研究がスタートし、現在では出土文献研究における主要な領域の一つとなっている。

これらの戦国竹簡はいずれも紀元前4世紀後半の書写と推定されており、中国古代の思想家を例にとれば、韓非子や荀子が活躍する以前、ちょうど孟子と同じ時代に相当する。筆者が研究者として歩み始めた30年前は、秦漢の簡牘・帛書を用いた研究成果が陸続と発表されていた時期であったが、当時、さらにそれを遡る戦国竹簡を資料として研究を行う時代が到来しようとは夢想だにできなかった。

本書の研究母体である「中国出土文献研究会」は、1998年10月に浅野裕一先生（東北大学名誉教授）を中心に発足した「戦国楚簡研究会」を前身とする。振り返ればいつの間にか20年の歴史を刻んできたわけであるが、研究会ではその間、国内の研究會合において各自の研究成果を報告するとともに、ほぼ毎年のように戦国竹簡を所蔵する中国の博物館や大学を訪問して実見調査や情報収集を行い、中国や台湾で開催される国際會議で発表するなど、海外の研究者と活発な學術交流を重ねてきた。

その成果は、浅野裕一編『古代思想史と郭店楚簡』（汲古書院、2005年）、湯浅邦弘編『上博楚簡研究』（汲古書院、2007年）をはじめとする6冊の著作として公刊されている。

本書はこうした継続研究の一環として、2016年時点における清華簡の研究成果をまとめた中間報告である。続刊の第九分冊以降の資料とともに、新たに安徽大学が購得した戦国竹簡の公表も予定されており、今後さらなる研究の進展が期待される。

